

居住意識と地域スポーツ活動の関連性についての検討

○大北 文生・松本秀夫・吉川政夫・川向妙子・大堀孝雄・高橋和敏（東海大学）

キーワード 川崎市民・居住区・居住意識・居住年数・地域スポーツ

1. 研究の目的

人生80年時代を迎え、スポーツは、心身の健全な発達を促すと共に、明るく健康で活気に満ちた豊かな文化的生活を営む上で重要な役割を果たすものであると思われる。社会の変化とともにスポーツに対する考えかたも大きく変化し、一人一人が日常生活の中でスポーツを楽しむことによって仲間との交流を深めるなど、近年スポーツが生きがいとして捕らえられるようになってきていると同時に、スポーツへの要求も多種多様化してきている。これらの状況をふまえ、市民の求めるスポーツを普及振興していくことは、重要な課題である。本研究では、川崎市の住民を対象に「市民のスポーツに関する実態及び意識」について調査をした中で、居住している場所・居住年数と居住意識と地域スポーツの関係についての検討を試みたものである。

2. 研究の方法

- 1)調査対象 川崎市在住の満18才以上の市民 1600人
年齢、性、居住区の層に分けて無作為に抽出
 - ①青年（18才～29才の男女）486人
 - ②中年（30才～59才の男女）860人
 - ③高年（60才以上の男女）254人
- 2)調査時期 平成4年11月18日～12月11日
- 3)調査方法 郵送して後日訪問回収 《有効回答者数 895人（55.9%）》
- 4)居住意識について 5つの項目を設定し、それぞれ5ポイント・スケールによって評定してもらった

3. 結果及び考察

1)居住地域に対する印象

図1～図2は、地域に対する居住意識を性別・年齢別・にした平均値の結果である。

結果は、「どちらでもない」の3.0を境にして、3.1以上であるほど好意的評価を、2.9以下であるほど非好意的評価をそれぞれ意味する回答者全体（N=895人）の結果では、「親近感」（3.4）、「愛着」（3.5）、「明るさ」（3.2）の項目にやや好意的評価が示され、「進歩的か保守的か」（2.9）と「特色の有無」（2.8）の項目にやや非好意的評価が示されている。すなわち、地域に対する回答者の評価は、「やや親しみやすい」、「やや愛着を感じる」、「やや明るい」反面、「やや保守的な」、「ややありきたりな」という印象である。

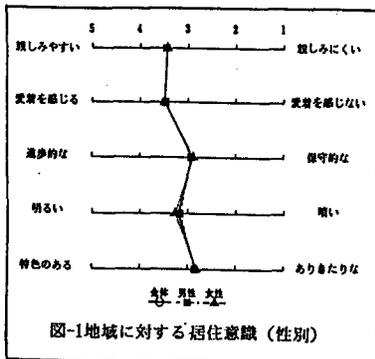
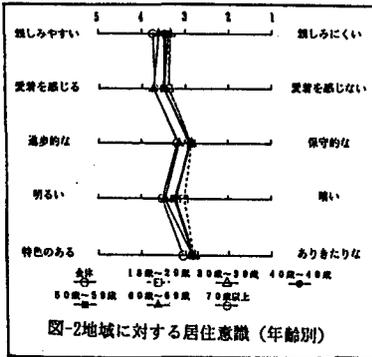


図1 地域に対する居住意識（性別）



5項目をまとめた総合平均は3.2であり、やや好意的な印象を示す評価結果となっている。

性別では、総合平均、各項目平均共に性差は見られない。すなわち男女とも居住地域に対して同じような印象を持っていると言える。

年齢別でも目だった違いは認められないが、全ての項目において、10才代～30才代→40才代・50才代→60才代以上へと、年代が高くなると共に、わずかずつではあるが好意的評価が高くなる傾向がある。特に70才代以上の年齢の好意的評価が顕著である。

居住区別(7地区)でも違いはあまり見られなかった。ただ、麻生区(山の手の新興地区)は、他の居住区よりも全ての項目において、わずかではあるが好意的評価が高い。また高津区(東京に隣接)の場合は、わずかではあるが好意的評価が他の居住区よりも落ちる。居住年数別では、居住年数が「5年未満」と「5年～10年未満」がそれ以上の居住年数に比べて好意的評価度が落ちる。特に、「親近感」と「愛着」についてそれがいえる。「親近感」と「愛着」の好意的評価度は、居住年数が長くなるにつれて高くなっている。職業別と勤務場所別では、評価結果に違いは認められない。

2) 居住地域に対する印象と他の項目とのクロス集計結果

上記の5項目の総合平均が2.9以下である回答者を「地域に対する印象の悪い群」(27.8%)、3.0以上の回答者を「地域に対する印象の良い群」(72.2%)に分けた。

これらの2群と他の質問項目間でクロス集計をおこなったところ、以下の4項目との間にカイ2乗検定で有意な関連性が認められた。「体力に自信があるか」との間では、印象の悪い群には「体力に自信がない」と答えてる人が多く、印象の評価が良い群には、体力への自信が「普通」と答えてる人が多い($p < 0.05$)。「川崎市の市民スポーツは他都市と比べて盛んか」との間では、悪い群は盛んでない、良い群は盛んであると答えている人が多い($p < 0.01$)。「年齢」との間では、悪い群には30才代以下の若い層が多く、印象の評価の良い群には、60才代・70才以上の高齢者層に多い($p < 0.01$)。

同じく、「居住年数」との間では、地域に対する印象の評価が悪い群には「5年未満」「5年～10年未満」の人が多く、地域に対する印象評価が良い群には、「10年以上」の年数の人が多い($p < 0.01$)。

4. まとめ

- 1) 居住している環境によりスポーツ活動の実態や意識の違いが見られるのではないかと考え、新興地(山の手地域)と昔からの地区(海側)・住宅地区と商業地区の比較をしてみたが、殆どの調査項目で両者の違いは見られなかった。
- 2) 居住意識と居住年数には、やや関係が見られた。すなわち10年未満の居住年数住民は居住地域に対する評価が悪く、居住年数の長い住民は、地域に対する評価が良い。
- 3) 新住民は、県や市の施設利用が少なく、又施設の認知度も低いようである。
- 4) 居住区内への施設要望は強く、多目的・複合的な性格を持つ施設などを望んでいる。